

清末中国人留日学生と『人生地理学』

——『浙江潮』を通して——

高 橋 強

はじめに

1 『浙江潮』

2 「植物与人生之関係」(第9期, 10期)

(1)『人生地理学』(第17章「植物」)との対照

(2)『人生地理学』への評価

3 「地人学」(第10期)

(1)『人生地理学』(第10章「海洋」)との対照

(2)『人生地理学』への評価

むすび

はじめに

牧口常三郎著『人生地理学』は1903年10月15日に、初めて世に問われた。本年は出版100周年に当る。同書は出版間もなく新聞各紙等にその評価が掲載され、大きな話題を呼んだ。当時、日本に留学していた清末の中国人留学生の間でも、話題を呼び、また注目を集めたものと思われる。浙江省出身者で発行していた月刊雑誌『浙江潮』に、同書の翻訳が掲載されたのである。同書出版の翌月『浙江潮』第9期(11月8日)に「植物与人生之関係」と題し、更に翌々月『浙江潮』第10期(12月8日)には「植物与人生之関係」(続)、「地人学」と題し発表された。

本稿では、これらの翻訳の内容を分析しながら、当時の中国人留学生が同書をどのように読んだのか、又どのように評価したのかを考察することを試みる。

1 『浙江潮』

『浙江潮』は、浙江出身の留日学生で組織された浙江同郷会によって、1903年1月に東京で創刊された月刊誌で、革命的傾向の顕著な内容となっている。毎月一期発刊され、全部で12期を数えた。毎期約200頁、字数は約10万字で、内容としては、社説、論説、学術、大勢大局、談話、記事、雑録、小説、文苑、日本見聞録、新浙江と旧浙江等の項目、及び最初の頁に付した絵や挿し絵である。同雑誌は発刊後、中国国内外で話題となり、同第1期から第4期まで累計して5,000冊、第5期、6期は計5,000冊、第8期は5,000冊発刊している。

同雑誌の内容上の特色は、三つあげられる。一つは、帝国主義的侵略やそれに起因する重大な危機についての文章が、大変多いという事である。これらを通し、青年や学生に対し、中国の民族的危機の根本的原因の認識を高めさせている。二つ目は、民族主義を鮮明に提唱し、一般民衆に対し清朝打倒を呼びかけている事である。三つ目は、進歩的な科学文化の学説を紹介することに対し、大きな役割を果たしたという事である。創刊号の発刊規定の中でも、学術の項目には、政法、実業及び経済、哲理、教育、軍事、歴史地理、科学文化等の内容を掲載すると明記している。実は紹興出身の魯迅も、いくつかのペンネームを使って、愛国民族主義を鼓舞した翻訳小説「スバルタの魂」(第5期, 9期)、亡国の危機感や産業救国の心情に溢れた地質論「中国地質略論」(第8期)、科学への興味を喚起しようとした翻訳小説「地底旅行」(第10期)等、多数の文章を同雑誌上で発表している¹⁾。

2 「植物与人生之関係」(第9期, 10期)

『人生地理学』の一部が「植物与人生之関係」と題し、黄孫によって翻訳されている。『浙江潮』の目次の中に分類されている項目は「実業」である。同翻訳論文は、『浙江潮』第9期, 10期の2回に分けて掲載され、目次は以下の通りで

ある²⁾。

緒論 (第9期)

1. 植物与人生
2. 栽培植物之効益
3. 森林植物之効益
 - (1) 直接之効益
 - (2) 間接之効益 (第10期)
4. 植物与人生之精神
5. 植物与文化

結論

(1) 『人生地理学』(第17章「植物」)との対照

「植物与人生之關係」は、『人生地理学』第17章「植物」³⁾を翻訳しながら、それに関連する中国の現状や、訳者の見解を書き加えた体裁をとっている。以下、両者を目次上で対照しながら、訳者の追加部分を紹介する。

『浙江潮』「植物与人生之關係」 『人生地理学』

- | | |
|-------------|---|
| 第1節 植物与人生 | 一 植物の人生に対する実用的關係
[植物の生産作用] |
| 第2節 栽培植物之効益 | 二 栽培植物と人生および地
[一 食料植物]
[二 工芸製造用植物]
[四 果樹類] |

[二 工芸製造用植物]の中で、稲、麦、粟属、豆類、甘蔗および菜、甘蔗および馬鈴薯、茶、煙草、藍、綿、麻、亜麻の項目の内、稲、麦、豆類、甘蔗、茶、綿、麻、煙草のみを翻訳し、桑を新たに加えている。

[稲]の項目には、次のような内容が書き加えられている。

紹興酒は米で醸造したもので、昨年の酒税は40円メキシコ銀であった。販売市場は南はベトナム、北は蒙古、東は日本にまで到り、西洋人も好んでいる。紹興酒には三徳があるそうだ。即ち臭いが良く、味も甘露で、円やかで、飲み過ぎても頭痛を起さない。従って他の地の多くの人もこれを好む。なお美しく飾り付け欧米に運んでもいい。葡萄酒と同じように称されるべきだ。これは我が浙江の富みの源である。

我国の長江の南北は、米作地域で、黄河以北は、温暖と湿気が不十分なので、その収穫量は減少する。しかし中国ではこれを生産しない所はない。生産額の多少が存在するだけである。余剰の米は輸出にまわされ、日本の明治32年の税統計に拠ると、支那からの輸入米は6万0322担(1担は約50キログラム)で、値段は96万7216円である⁴⁾。

[麦]の項目では、次のような内容が書き加えられている。

種々の麦は多くは北方で生産され、南方では僅かである。南方では米が主食で、北方では麦が主食であるからである。その用途は広く、麵やワンタンだけでなく、麦食にもなる。また大豆に配合し醤油を醸造し、糯米の粉とまぜ茶菓子となす。農民の中には糯米或は山芋と合わせ麦飯を炊く者もいる。そうするのはおそらく北方の窮民が多い。

中国は皆此の限界内(麦生産の緯度上の範囲)にあり、麦を植えられない所はない。今日北アメリカからの麦の粉の輸入は、益々盛んになり、庚子年(1900年)以来益々西洋の粉を用い、その何処より来るか

を尋ねると、おそらくアメリカからで、憤慨すべきことである⁵⁾。

[豆]の項目では、次のような内容が書き加えられている。

我国で最も多く生産するのは、満州で、営口から各地に輸出される。大豆、豆餅、豆油の3種類に分けられる。乙亥年(1875年)を調べて見ると、営口から輸出された大豆は422万0963担、豆餅は369万5821担、豆油は10万8323担で、その中で日本に運んだものは、大豆が199万9832担で59万0458円、豆餅が209万8258担で461万0625円であった。我国が輸入する日本の製品では豆類が第1位である⁶⁾。

[甘蔗]の項目では、次のような内容が書き加えられている。

我国福建一帯は多く生産している。台湾一帯では盛んである。早くは日本がそこを奪い取り、その後製糖業を奨励した。

振り返って我国を見ると、反って外国の輸入糖に頼り、一昨年の税統計では輸入糖額は、およそ263万4千余担であった。我が国民はその田畑で生産されるものを食することを望まず、田畑を以て他人にこれを贈り、その生産物を購入し、以て食する。吾人はそれが如何なる心情かわからない⁷⁾。

[茶]の項目には、次の内容が書き加えられている。

我国の茶の生産は素より盛んで、西洋人と交易をするようになって以来、これと生糸が輸出品の多くの額を占める。しかしここ十年來の衰退には、内外二つの理由がある。外因は即ち、各国の茶の出現で中国茶は競争状態にあることは、もとより言うに忍びない。今から十余年前に不正商人が偽物と混せて欧州に運び、信用を大きく失

った、ということを知った。それ以後、次第に衰退し、昨年茶市が衰退したので役所が輸出税を半額にするという特典を以て、茶業を奨励したので、やや盛んになった。今年は昨年に比べ良くなったが、また不正商人が偽物を以て混ぜたので、その衰退はまた予想することが出来る。中国の制裁を加える方法は、もとより改善していないので、外国茶と競争できない。また一度だけでなく二度の偽りは、信用を尽く失墜させ、販売ルートを尽く途絶えさせた。吾人の生計と今後は、人心は損なわれたという所にまで到った。中国の不沈を望む。ここに言及するに到り、涙が何処に到るや、吾人はそれを知らない⁸⁾。

[綿]の項目には、次の内容が書き加えられている。

綿は中国では浙江と江蘇の二省の生産が多い。己亥年(1899年)の外国輸出を調べて見ると、298万0373円に当る。中国産の綿の繊維は短いが雑でなく、中国の綿を用いると染色し易く、北アメリカやインドの綿は雑で、北アメリカやインドの綿を用いると紡績し難いらしい。ただこの言葉がそうであるか否かはわからない。綿から作った油も、その需用は高いし、紙を作るという事は西洋諸国では行っている所もある。中国はまだその域には達していない⁹⁾。

[麻]の項目については、内容は翻訳ではなく、全て訳者の見解である。

麻は土砂があつて植物を耕作出来ない所以外、これを産しない所はない。アジアではシベリアからインドまで産しない所はない。中国産は大変多く、四川、湖北、陝西が最も多く、福建がその次である。その麻は精と粗の2種類に分けられ、精類は広東、潮州、福建に運び布を織る。即ち吾人が着ている夏の布である。粗類は麻布、麻袋、

麻の入れ物、麻縄にして外国へ輸出する。一昨年は約17万4644斤（1斤は約500グラム）に達した¹⁰⁾。

〔桑〕の項目は、項目そのものを書き加えている。

桑の用途はまず蚕を飼育することで、一日でも桑がないと死んで硬直する。その業の盛衰は、専ら桑の豊欠に拠る。生糸生産は桑が多いことにこした事はない。その重要性は綿、麻の諸植物より高い。我国の輸出品は、生糸が主で、桑の需用が益々増えている。近年来生糸の価格が高くなっているの、養蚕家は日増しに盛んになり、桑園もまた日増しに広がっている。浙江杭嘉湖一帯は、殆ど桑園が広まっていて、浙東での栽培が比較的多い。しかし栽培方法が素より改良されていないので、収穫は期待していた量より増えていない。改良と進歩があると、その影響は蚕業に良く現れると予測出来る。桑は温暖で潤湿の地が適しているの、我国浙江一帯が最適の地である¹¹⁾。

〔煙草〕の項目には、次の内容が書き加えられている。

国産は、四川、湖北、湖南、河南、安徽が盛んで、煙草市は漢口に集まり、漢口から各省に運び入れられ、福建に入り皮絲が、山陝に入り青条碧緑が、江西広東に入り漢絲が、浙江に入り元奇朝煙が製造（各々、各地の煙草の銘柄か）され、その他の場所に販売される。生産でいうと、もし前述の地以外で多くて良好な所は満州一帯で、生産が盛んである。北の五省で吸われている煙草の半分は満州産で、外国への輸出では英国が最初で次が日本である。紙煙草は我国は輸入しており、近五年来の紙煙草消費量は増えている。（略）中国は煙草税収入に富んでいる。（略）¹²⁾

〔四 果樹類〕の中では、梅、柑類、桃および柿、梨類、林檎および葡萄等の内、梨、林檎、葡萄のみ言及し、新たにレイシ、龍眼、ミカン、ザボンを加えている。その項目の内容は、抄訳をしながら大部分は訳者の意見で構成されている。

我国の気候は、寒、温、熱帯があり、地に適した果物が多く生産され、計り知れない。その中でも南の福建、北の河北は最も盛んである。福建のレイシ、龍眼、ミカン、ザボン、河北の梨、林檎、葡萄は最も良好な果物である。もし貯蔵の方法を知るならば、遠方に輸出でき、必ず大きな利益を得ることが出来る。欧州人は果物を好むが、その地での生産は充分ではないので、異国の地の供給を求める。日本人はその事情を調べ果実業を大いに奨励している。薩摩の橙、紀州のミカンは輸出され、大きな利益を得ている。我国がもしこれを模倣できれば、利を得ることは莫大であろう。ドイツ人が山東に果物工場を開き、安く各種の果物を集め、欧米に運び大きな利益を上げているそうだ。（略）¹³⁾

『浙江潮』『植物与人生之関係』『人生地理学』

第2節 森林植物之効益

三 森林と人生および地

（1）直接之効益

〔一 森林の生業に対する直接効用〕

「一 森林の生業に対する直接効用」の中では、摺附木、洋紙の内、洋紙のみ翻訳している。〔林業と地味〕については翻訳がない。訳者によって書き加えられた主たる内容は次のものである。

今日その紙（日本製の紙）があつと言う間に黄海を渡り、中国上海の数十を下らない新書書店に到っている。試しに棚の上の何色でも子細に観察すると、それらの本の紙は皆日本製である。吾人はこの部

分を読むに到り、悲しい。故郷である我が浙東には竹林が多く、農民は多く製紙をしている。しかし作った紙は黄色で、泥のように粗い。これを紙銭の原料として各省に運び、混沌とした郷の中で、人々にその精力を消耗させている。(略) 吾人はその増加が如何なる国の富みになるのか、その拡大が如何なる利源になるのか分からない。幼稚なせいで、粗悪品によって、人の迷夢が増していることを分かっていない。他国の民は、国民を利する智者は益々その知恵を増すことを得、我国の民は、人や自己を害する愚者は益々これを愚にすることを得ている。従って心有る者は、印刷事業に従事しようと欲するが、反って異邦の輸入品を用いざるを得ないのである。ここを読むに到り、我が涙は波の如くなり。吾人はまた我が浙の竹林の繊維は、大変多いと聞いた。新法を用いてこれを作り、粗をして精にし、黄をして白にし、莫大な利源を実現させよう。同胞たちよ、その為に立ち上がろう。我が生活を豊かにする為に、もし再考しなければ、異民族が我々にとって代るだろう。

我国を振り返って見ると、もとよりこの原料を産する最も富んだ地域である。同胞よ、最大の富源は最も親愛なる故郷にあり、自覚をし大国民の品性を傷つけるべきではない。二十世紀において、工業を以て世界に打ち勝ち、莫大な資本を擁し、莫大な幸福を享受する資格や地位は、曾ては望むことが出来たのである¹⁴⁾。

『浙江潮』「植物与人生之関係」 『人生地理学』

(1) 間接之効益

[二 森林の生業に対する間接効用]

[森林と農業], [森林は水量の調節器], [森林と旱魃], [森林と漁業] を、各々翻訳している。

訳者によって書き加えられた主たる内容は次のものである。

我国庚子年(1900年)の陝西の大飢饉で人が人を食べたと言う、その理由は、1年も雨が降らなかったからである。その特に近因は、黄砂で昼間も一望出来ず、山は皆荒れはて、赤土がおおい、草木がなくすっかり禿げわたり、植えても生えない、即ち、旱魃が大きな原因であったと聞いている。もし森林保護に注意を払わなければ、飢饉の禍は再三襲ってくるであろう。我が国民はもうろうとしていて、その因果を知らない。水害や旱害はどちらも閻魔大王が主宰するもので、その中でまるめこむと旱害になり、龍王に雨を求めると水害になる。土地の神に問い、晴れを求む。其の愚昧はここまでになり、心を痛めさせないことがあろうか。しなしながら、一般の平民は如何なる責めや罪があろうか。有識者、君子、数十年の読書人、朝廷で要職に着いている者は、結局は俗っぽい悪劣な行動をとり、愚昧で無知な行動をとっている。庚子年(1900年)間、連合軍が天津に駐留した時、ちょうど旱害の時、官吏は農民を引き連れて太鼓を叩いて祈祷した。天津城内にいた欧米の兵士たちは見て笑ったが、当事者たちは意気揚々で、我国の水害旱害を治める方法以上に良いものはないと思っていた。ここにおいては痛恨の極みである。しかし天津の官吏に如何なる責めと罪があろうか。二十一の行政省庁を見て見ると、上は官吏から下は農民まで、祈祷しないで水害や旱害を治めようとする者がいるだろうか。ただしある仏門の数人の信徒たちは、次のように言っていた。即ち、国家が滅亡しようとしているのに、反って神に命運を聞くととは、これは即ち我が中国の命運も、そう遠くないことを示していると¹⁵⁾。

『浙江潮』「植物与人生之関係」

『人生地理学』

第2節 植物与人生之精神

五 植物の人生に対する精神的方面

『人生地理学』が言及した「心情の涵養」を、訳者は「徳性の涵養」と「感情の陶冶」に分けて展開した体裁をとっている。訳者によって書き加えられた主たる内容は次のものである。

一、徳性の涵養。人類は道德性を具える動物である。種々の善、美、高尚、偉大、沈勇、堅苦は自然に賦されている。吾人の一生の行動の基準は、外の物ではない。これに接触することで、作用させ成長させるのである。日久しく消沈しても表面にはあらわれないが、その能力を見る。かの植物はこの種々の性質を最も養成し、次第に長所や短所を生じさせ、以て高明に進展させるのである。(略) 植物は根から幹へ、枝から葉へ、花から実へと、皆一定の組織がある。即ち偏りを経て万を統一する事が可能で、全てを知る事が可能である。一部天然の規則を模倣し、人に模倣物を提供する。これを照合する者は、秩序の思想が起きてくるのである。春に花が咲き、秋に実がなり、啓蟄に芽が萌え、霜降に落葉す。これは気候の影響に因る。種々の生活を営じ、以てその時間を過ごす。これを照合する者は、勤勞事業の心を起す。(略) その他師竹の中は、虚心坦懐で、また松柏を感じた後、堅忍不拔の寒梅をならった忍耐を刻む。従って努力し自身を励ます例は実に多く、枚挙にいとまがない。皆天然の作用の徳性への影響である。(略)

一、感情の陶冶。吾人は目を閉じ、無情物、有情物を思い、脳裏に浮かぶその名を述べる。心を目に移し、形や色を見る。我が眼前の雑物を、その名を述べる。物は心と物が互いに接して感情を生む。物の大なるは、世界、人類、国家、民族を述べ、小なるは一家、一身、一物に到る。全て我が心が望む所に添うことは出来ず、常に欠乏、罪惡、憂えや苦しみ、危険という種々の悩みが、あとからあとから続いて来る。一日の内十二時間は吾人を和やかに楽しませるこ

とが出来る。どれだけの植物が、吾人の悩みを全て無くすことはできないが、理想郷に致らしめ、その勢いで以て温和で善良に致らせることが出来るであろうか。吾人が疲労困憊し、憂鬱で手持ち無沙汰の時の事を考えて見る。一度郊外に散歩に出かけて見ると、心が広々と気持ちちが和らぐ。植物はその美麗で以て蜂や蝶に働きかけ、山川と対照しあっている。以て吾人の審美も感情を引き起す。吾人はこれを感じる。従ってかえっていっそう、その葉の美しさ、花の赤さ、香りのふくよかな果物の歡樂の情をめぐる。急に発生する出来事や事物は、吾人を生存競争の世界に処するだろう。生の苦しみや無生の樂ありて、解脱の方法を思う。(略) 就中感情の深いものは、これを愛し、人類の女子や学术界の詩人に手厚い。それは植物を愛する事が、特に深い者である。詩人は植物に対し、思いもよらない興味を生じ、以て詩の材料を提供する。(略)¹⁶⁾

『浙江潮』「植物与人生之關係」 『人生地理学』

第2節 植物与文化

六 植物と文化

訳者は、『人生地理学』の内容を翻訳しながら、時には中国の現状を、時には翻訳の内容に刺激された自身の見解を展開させながら、新たな内容を書き加えている。そしてそれらを総括する意味で、「結論」という項目を新たに追加している。

植物と人生は、以上のように重大な關係が有るばかりでなく、入り交じって複雑で、大雑把に解釈してはいけぬ。その關係は、大きくは國家に到り、小さくは淺薄な衣食のことにまで到り、植物と關係のないものはない。この点より、我が國民は植物に対し、如何に重視し、如何に徹底して關心を持たねばならないかを知る。更に農業を獎勵し、森林を保護する精神の下、栽培方法を説明し、管理方

法を検討する。これを以て国家の財産を増加させ、国民の幸福を増進させるのである。我国の植物に対する一般的な観念を振り返って見ると、結局食肉動物のようで、低俗で高遠なところに目をつけることが出来ない。腐敗した官吏は、責任を負わないのである。上級階級の人間を咎めるべきである。彼らが居る場所では、毎日用いる食物や衣類が提供されている。これらは、人の命と長く関係してきた。しかし彼らは反って全く無関心で、その程度は判らない。甚だしきは、豆と苗と麦の見分けがつかなく、松、杉が何であるかも知らない。このような状況下において、彼らが植物学や森林学を研究する事を、どうして望むことができようか。結局、農事が日増しに悪化するだけで、既成のきまりを固く守って変えようとせず、改良や進歩はない。他国の民は五、六倍の利益を得られるのに、我国の民は一倍しか得られない。森林については、お話しにもならない。到る所が荒れはてている。今日鉄道敷設の議論を起し、その枕木を遠方の日本の北海道から買おうとしている。恥ずかしいことだ。農業が不景気なので、その危害が直接工業に及び、我が国民は失望している。もし自国に希望をもたせたいなら、国民と一致して農業、林業に尽力するよう考えるべきだ。二億平方キロの土地は一つ二つの砂漠は耕作できない以外は、その他の土地はもし農耕に適さなければ、まおまだ林業に適しているのである。もとより我が黄河民族は、二十世紀において、絶好の根拠地で、外敵に打ち勝つのである。同胞よ、有識者よ、何故に帰来しないのか¹⁷⁾。

(2)『人生地理学』への評価

『浙江潮』第1期では、発刊の目的の中に「実業」の紹介や「物産経済上の浙江」や「農工商業上の浙江」(「新浙江と旧浙江」項目内)の紹介が明記されていた。この主旨に基づき、同第4期では「紹興新昌県の物産」が、第6期では「青田県の物産」が、第7期では「湖州の物産」が、第9期では「嘉興平湖の物産」

が詳細に紹介されている。まさに浙江の農業、林業、漁業の調査報告である。

「植物と人生之関係」の中では、農業や林業の興隆が急務であると主張している。同翻訳論文が「実業」の項目に分類されていることから、その一端が伺える。同論文が掲載される前には、「実業」の項目で掲載された論文は、第5期や第7期での銀行に関するものであったので、農業や林業関係のものは、同論文が最初である。従って同論文は、これまで掲載してきた各地物産の調査報告をも踏まえていると考えられる。

それでは何故に『人生地理学』に注目したのであろうか。それは同書の「食料植物」「工芸製造用植物」「果樹類」等における項目が大変豊富で、配列順が前述の各地物産の調査報告のそれに類似していた事が理由の一つとしてあげられる。各地物産の調査報告を学術的に整理し展開しようとして、同書の翻訳を進めていったものと考えられる。なお各項目において追加された内容は、結果として郷土浙江のそれから更に祖国中国全体にまで言及したものになっている。

更に同書が、「植物と人生」「植物と文化」にまで言及したことが、もう一つの理由として考えられる。「植物と人生之関係」の結論の冒頭では、「植物と人生は、以上のように重大な関係があるばかりでなく、入り交じって複雑なので、大雑把に解釈してはいけない。その関係は、大きくは国家に到り、小さくは日常茶飯事の衣食のことまでに到り、植物と関係のないものはない」と明記し、論を展開している。同翻訳論文のテーマを、結論の冒頭で再度確認している形となっている。

他方、「植物と人生之関係」の結論の中では、憂国の心情が到る所で感じられる。「彼ら(官吏や上級階級の人間)が植物学や森林学を研究する事を、どうして望むことができようか。農事が日増しに悪化するだけで、(略)改良や進歩はない。他国の民は五、六倍の利益を得られるのに、我国の民は一倍しか得られない」「森林については、(略)到る所が荒れはてている」「もとより我が黄河民族は、二十世紀において、絶好の根拠地で、外敵に打ち勝つのである。同胞よ、有識者よ、何故に帰来しないのか」等。

このような心情は、結論の中だけでなく、追加の内容の中にも到る所で見ら

れる。「中国は、(略) 麦を植えられない所はない。今日北アメリカからの麦の粉の輸入は、益々盛んになり、庚子年(1900年)以来益々西洋の粉を用い、その何処より来るかを尋ねると、おそらくアメリカからで、憤慨すべきことである」「我が国民はその田畑で生産されるものを食することを望まず、田畑を以て他人にこれを贈り、その生産物を購入し、以て食する。吾人はそれが如何なる心情かわからない」「今日その紙(日本製の紙)があつと言う間に黄海を渡り、中国上海の数十を下らない新書店に到っている。試しに棚の上の何色でも子細に観察すると、それらの本の紙は皆日本製である。吾人はこの部分を読むに到り、悲しい。故郷である我が浙東には竹林が多く、農民は多く製紙をしている。しかし作った紙は黄色で、泥のように粗い」等。

『浙江潮』は、帝国主義列強に侵されつつある祖国を憂い、郷土を愛する留学生によって発刊されたので、このような心情に溢れているのは、むしろ当然であろう。一方『人生地理学』は、このような留学生に対し、深く印象づける視点を有している事も確かである。例えば同書「緒論」においては、「慈愛、好意、友誼、親切、真摯、質朴等の高尚なる心情の涵養は、郷里を外にして容易にうべからざることや」「もって郷土が人間におよぼす不思議なる勢力の概要を知るをうべきか」等¹⁸⁾、人間にとって郷土が如何に重要であるかを、その関係性を学術的に展開している。更に同「緒論」において、「万国比隣、国と国、人種と人種、虎視眈々、いやしくもいささかの罅隙あらば、競いて人の国を奪わんとし、これがためには横暴残虐敢えて憚るところにあらず。もっていわゆる帝国主義の理想に適えりとなす。(略) 人の物を盗むものは盗として罪せらるるも、人の国を奪うものは、かえって強として畏敬せらるる時世にあらずや」¹⁹⁾と述べ、帝国主義を批判している。これらの視点も、留学生が同書に注目した理由の一つかもしれない。

3 「地人学」(第10期)

『人生地理学』の一部が『浙江潮』第10期の中で「地人学」と題し、壮夫によって翻訳されている²⁰⁾。目次の中に分類されている項目は「地理」である。実

は同翻訳論文は、もともとは内村鑑三『地人学』を翻訳したもので、同第4期、5期、7期に掲載されていたが、第10期だけが、『人生地理学』第10章「海洋」の翻訳になっている。同翻訳論文の目次は以下の通りである。

第一章 性質之研究(第4期)

地理与殖産

地理与政治

地理与美術文学

地理与宗教

第二章 地理与歴史(第5期)

山与自由

山与英雄

東西脈(第7期)

南北脈

平原国

海国(第10期)

(1)『人生地理学』(第10章「海洋」)との対照

「地人学」(第10期)海国は、『人生地理学』第10章「海洋」を翻訳(抄訳)しながら、内村鑑三『地人学』第3章の中の「海国論」の一部も取り入れ、訳者の見解を書き加えた体裁をとっている²¹⁾。以下、両者を目次上で対照しながら、訳者の追加部分を紹介する。

『浙江潮』「地人学」海国

『人生地理学』第10章「海洋」

七 海洋と衛生

八 海洋と産業

十 海洋と心情

三 開明人と海洋

訳者は、翻訳の内容に刺激を受けながら、自身の見解を書き加えている。

我が国民は、それをまた聞いている。白人の用いた植民と商業の二つの政策より、世界の趨勢が開かれたと。南北アメリカ、オーストラリア、アフリカは白人化され、サハラは沙漠の砂で“白”くないものはない。そして白人化されつつある支那問題が起きている。同じ白人的でも方法が異なる。陸軍を以てではなく鉄道を以て、海軍を以てではなく、船舶運輸事業の勢力を以て範囲を既定する。従って、支那大陸、全世界の大陸もまた無限に白人化しつつある。支那大陸の処置は、実際は世界大陸の最後の処置である。その処置は、列強の対外磁石針が突然変化した時に実行される。²²⁾

我が中国の生死存亡と極めて大きな関係がある事で、大変心を痛める。我国を悲しむ、我が国民を悲しむ。地図を広げて見よ、それは悲哀の記述である。制海上の要衝をどれだけ分割されたか。占領された地はどれだけか。囲われた勢力範囲はどれだけか。地理上から見ただけであるが、我が中国はまだ雄飛する希望があるのだろうかと思う。

観雲氏には中国の興亡というこの問題に関する地理編があり、述べている事が真実で、参考にする価値が大なので、特にその一節を抜粋する。

“我が民族をして永遠に回復させなければ、永遠に立国の時はない。もし立国の日があるとすれば、中国は大太平洋上の国家で、大太平洋での権限がなければならない。大太平洋での権限があると考えたら、大太平洋の海軍がなければならない。大太平洋の海軍があると考えたら、大太平洋の中国の海岸、良港の根拠地を使わなければならない。

これらの天から賜った地と山と海は、みな祖先が留め残してくれた地である。話題になっている香港、船山、秦皇島、威海衛、胶州湾、瓊州三門湾、澳門、旅順、大連湾等は、どのようにして、英国、ドイツ、ロシア、フランス、イタリア、ポルトガル等の国から、吾人らの手に取り戻すことができようか。たとえ遺留の地が偶然のものであったとしても、海軍を再建する地として使用することが出来る。英国、ロシア、フランス、ドイツ、アメリカ、日本の各強国に挟まれて、その勢力を分け、その抑圧を受けないように出来るのであろうか、自立が出来るのであろうか。(略)”²³⁾

(2)『人生地理学』への評価

『地人学』海国の翻訳内容は予定としては前述の如く、内村の『地人学』第3章「海国論」の翻訳であった。しかし同翻訳論文は、「海洋と人生の関係とは」から論述が始まり、具体的な内容は、『人生地理学』第10章の「海洋と衛生」「海洋と産業」「海洋と心情」の抄訳である。やはり人生や生活との関わりという視点は、訳者の関心を強く引いたものと考えられる。

内村の『地人学』「海国論」については、「国防としての海の用」「通路としての海の用」の一部を簡潔に翻訳しただけで、むしろ力点は、それに続いて翻訳された『人生地理学』の「開明人と海洋」にあるように思える。同項目の中の特に「大太平洋と列国」の内容も追加し、欧米列強国が大太平洋を舞台にして、船舶や海軍等を以て、制海権、通商権をめぐる熾烈な競争を繰り広げている現状を、詳細に紹介している。

訳者が追加した自身の見解の中でも、西洋列強国の鉄道や船舶運輸事業等即ち産業によって、中国がまさに植民地化されようとしている危機感が述べられたり、また中国は大太平洋での権限があるにもかかわらず、それを実現する為の海軍が根拠地とすべき港が西洋列強国に分割されている現状を憂う心情が述べられている。

むすび

まず「植物与人生之関係」も「地人論」も、『人生地理学』の「人生・生活との関係」という観点に注目したものと考えられる。前者は論文タイトルに直接表現し、後者は論文冒頭で“海洋と人生の関係”を提起し、論を展開している。特に前者では、「植物与人生之精神」の項目で新たに「道德の涵養」と「感情の陶冶」を設け、相当量の自身の見解を展開している。もとより「人地の相関の理」探求は、伝統的に取り組んできた大きなテーマであった。従って正にそのテーマが書名となっている内村の『地人論』は、『浙江潮』でも第4期という早い時期から翻訳が掲載されていた。

次に両翻訳論文とも、『人生地理学』の産業に関する豊富かつ学術的な内容に注目したものとする。前者では農業と林業の振興を、また後者では漁業・水産業の振興を訴えている。特に前者では、『浙江潮』に掲載された各地物産の調査報告を、『人生地理学』を通しながら整理し展開した感が強い。産業救国の強い心情を持った留学生にとって、有益な一書と映ったのであろう。

更に両翻訳論文とも、『人生地理学』の「帝国主義の拡張競争への憂えと批判」という観点にも注目したと考える。特に後者においては、大平洋での中国の権限が実現できない憂えや憤慨を、『人生地理学』の「大平洋と列国」を翻訳しながら思索し、文章に現している。

注

- 1) 張杉『從浙江看中国教育近代化』, 広東教育出版社, 1996年, 167-169頁。呂順長『清末浙江与日本』, 上海古籍出版社, 2001年, 133-136頁。
- 2) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 浙江同郷会雑誌部, 1903年11月8日, 27-39頁。黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第10期, 前掲12月8日, 41-51頁。
- 3) 牧口常三郎『人生地理学』(上), 第三文明社, 1996年, 83-125頁。
- 4) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 31-32頁。
- 5) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 32-33頁。
- 6) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 33頁。
- 7) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 33-34頁。

- 8) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 34頁。
- 9) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 34-35頁。
- 10) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 35頁。
- 11) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 35-36頁。
- 12) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 36頁。
- 13) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 36-37頁。
- 14) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第9期, 前掲, 39頁。
- 15) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 43-44頁。
- 16) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 46-48頁。
- 17) 黄孫「植物与人生之関係」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 50-51頁。
- 18) 牧口常三郎『人生地理学』, 前掲, 25-26頁。
- 19) 牧口常三郎『人生地理学』, 前掲, 14-15頁。
- 20) 杜夫「地人学」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 71-78頁。
- 21) 『人生地理学』, 前掲, 218-250頁。内村鑑三『地人学』, 警醒社書店, 1901年1月, 48-54頁。
- 22) 杜夫「地人学」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 76頁。
- 23) 杜夫「地人学」, 『浙江潮』第10期, 前掲, 77-78頁。

(たかはし つよし・委嘱研究員, 創価大学教授)